
東方植物戦争記 ~ legend of Plant wars

台風X号

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方植物戦争記 Legend of Plant Wars

【Nコード】

N5686I

【作者名】

台風X号

【あらすじ】

人間界に植物戦争が、起こり始めた。赤夜ナチスの目的とは一体何なのか？

プロローグ 始まったばかりの戦慄（前書き）

スペルコードがあとがきにありますが、見てください。

プロローグ 始まったばかりの戦慄

人間界とは違う世界、植物界そこは、戦争が耐えてはいなかったのだが、トウダイグサ・スカーレットという者が、植物平和連合軍を作り、豊かになるうとしていたのはずが……

「コリユースパニック」

ニシキソウ准尉が、ロボットと対決していた。訓練のようである。

妖鎌は持つておらず、違う武器を持っていた。

「訓練終演」

「ったく、少しはレベルを上げろよ」

「悪かったな」

犬猿の仲であるらしい、ネナシカズラ伍長とニシキソウ准尉。

「妖鎌を渡すぜ。」

「だから、妖鎌を上腕にかけんな。」

「臭っ」

「妖鎌、相手にせんぞ」

「どうもすみませんでしたんごぶ。」

「ぶっ飛ばすからな」

テリハニシキソウ一匹狼兵は、滝にあたり寛いでいた。

肉刀ナイフを見ていたのはバラ大将だ。

ネナシカズラは、あるものをキャッチした。

「これは、トウダイグサ殿に報告しなければ。」

「なに、赤夜ナチスというものが宣戦布告しに来ただと。」

「しかも、人間界を襲っているみたいなんですよ。」

人間界では、植物の反乱として恐れられていた。

トウダイグサ・スカーレット大佐は、円陣を出した。そこから弾幕を発射した。

ナチス科の植物軍の800人が消えた。

「平和を穢すなら、穢すがいい、俺がたっぷり殺してあげる」

博霊 霊夢と霧雨 魔理沙もいたのだが、かなり危険なところに入った。

とそこに、タカトウダイ中佐が来た。

「炎符 ファイヤー・フィールド」

ナチス科の軍団は20000人ほど消えた。

「大丈夫かい、お譲ちゃん達。」

「大丈夫ですけど。」

「後ろを見る」

「死ね」

「火符　バーストキル」

「うわぁーまるであいつみたいだわ。」

「ホントだぜ。」

トウダイグサ・スカーレット大佐は、敵の血を飲んでいて。

「平和穢した者の血は、とても美味しい。」

しかし、厄介なことにナチス科の軍団は人間界の至る所にいた。

「こんなところに、あいつがいるとはな」

「誰だ。」

「えんまんりよつたつな塩満了燧南だ。」

「俺の名は、ニシキソウ准尉だ。」

「籙課符 使徒性の生きざま」

「妖鎌 二次大戦の記憶」

二つの弾幕はぶつかりあった。

ナチスという者は、何を企んでいるのか？そして人間界を襲った理由とは一体？

答えを求め再び植物の戦争がおこる。

ブローグ 始まったばかりの戦慄（後書き）

一つ目のスペルコードは、軍人のスカーレットデビル
ブローグに東方植物戦争記の挿絵をゲットしよう。
スペルコードは全部で4つあります。

第一話 怖いよトウダイグサ・スカーレット大佐殿(前書き)

希望の第一話登場、スペルコードは、登場しません。

第一話 怖いよトウダイグサ・スカーレット大佐殿

タカトウダイ中佐は、二人の少女を保護したということをとウダイグサ・スカーレット大佐に知らせるために行ったが……

敵がいた。

しかも戦いが始まっていた。

「トウダイグサ・スカーレット大佐ってあの人のこと？」

「そうだよ。」

「なんか怖い感じがするぞ」

「慣れるといいよ。」

「慣れたくねえ」

「君たち、平和を穢したんだね、平和穢したんだね。ふふふふふふ」

霊夢の髪の毛と魔理沙の髪の毛が逆立った。恐怖感が妹様より怖いのだろう。

「平和を穢すなら殺すのみだな。」

「怖いってあれって、某アニメのキャラクターの平和主義態度とフランチちゃんの狂気が混ざっていて怖いって」

「私なんか自重するわ」

「落ち着けつと声が大きいぞ」

「禁忌 平和玉」

「ドラゴンのパロディか」

「消し飛んじまった。」

「EHSは平和主義者なのか？」

「平和　そして誰もいなくなる？」

霊夢は思った。トウダイグサ・スカーレット大佐って意外と面白い人だと。

「戦争の敵がー」

「うるさい、戦争が好きなクズ共が、鬼銃　ロビンフッドブラッド」

「死にやがれー」

「禁忌　クラウ・ソラス」

「うわぁーこれは怖いぜ。」

魔理沙は思った、トウダイグサ・スカーレット大佐とはかかわりた
いのかかわりたいが……と

「丸い満月」

「馬鹿野郎、吸血鬼に見せたら……」

「にじっ」

「嫌な予感がするんですけど（怖憶）」

「最強平和 平和穢すなら殺すのみ」

戦闘は終わったのだが、トウダイグサ・スカーレット大佐は敵の血や肉片を食べたり飲んだりしていた。

「大佐殿、少女二人を保護しました。っと二人の少女が大佐殿見て怖がっているのですが？」

「おっと、これは失礼した。お二人さん名前は？」

「博霊 霊夢です。」

「霧雨 魔理沙です。」

「タカトウダイ中佐。」

「はいっ」

「回れ腰」

「えっーなんかのパロディ」

「普通は回らんだー。」

霊夢と魔理沙は、やっぱりこの人は面白過ぎと思った。

「うるさいなーこの最終鬼畜平和主義者トウダイグサ・S大佐」

「出てきやがったな」

「名を言え」

「俺様の名は、妖卯 魂金だ。」

「危ない名前だな」

「どこに突っ込み入れてるんだ貴様ー」

「突っ込み入れて当たり前だー」

「戦路 戦はどこまでも」

「ぬるいな、禁忌 おふざけは許さない」

魂金は、血まみれになった。

「ねえ、球筋。」

「魂金だ。」

「肉片喰わせてもらっつからな、スペカの使い過ぎで疲れているんでね。」

魔理沙と霊夢はものすごく青ざめていた。

第一話 怖いよトウダイグサ・スカーレット大佐殿（後書き）

今回はニシキソウ准尉の戦いに移ります。
ずっとトウダイグサのターンではありませんのであしからず。

第二話 開戦前の静けさと云つ不吉さ（前書き）

ニシキソウ准尉と塩満了燧南の戦いが前半戦を完全に占めており、その次が開戦前の不吉な静けさが、後半戦を一気に占めます。

第二話 開戦前の静けさと云つ不吉さ

塩満了燦南とニシキソウ准尉は疲れていた。

「この一撃が最後を締め括るかどうかわからないが賭けに出るしかない。」

「このニシキソウ准尉とやらを早くぶっ殺して赤夜ナチス様に報告しなければ。」

「望みは、一回きり」

「とりあああああ」

刀と妖鎌がぶつかりあった。

「ニシキソウ准尉、一気に攻めましょう。」

「そうだな、妖鎌。」

「何」

弾幕を発射した。

燧南の額や、右肩から血が出ていた。

弾幕の衝撃で刀も折れていた。

ニシキソウ准尉は、スペカの二つを繰り出そうとしていた。

燧南がスペカを使った。

「光殺 麒麟桜」

ニシキソウ准尉は妖鎌の指示通りに軽やかに避けていった。

「妖鎌、いい提案が俺にあるが。」

「何だそれは。」

「特攻弾幕を使ってみるいい機会かもしれないからさ。」

「よしっ、やってみせてくれ。」

「行け特攻弾幕よ。」

燧南はグレイズをしていた。

「こっちの番ですよ。」

「しまった。」

「戦符　戦の終わりは宴なり」

燧南は右腕と右足と左目と左足を失った。

そしてニシキソウ准尉が持つサバイバルナイフで燧南の心臓を一突きされて死亡した。

新たな戦争は、静けさから始まるうとしていた。

「なんだか、月面戦争より1000倍の激しさになりそうな予感。」

霊夢と魔理沙はびっくりした。

「優曇華、何でここに。」

「俺が保護してまいりました。」

「ノウルシ曹長、御苦労。」

「大佐殿、すごいことになってきましたね。」

トウダイグサ・スカーレット大佐はこんなことを言った。

「東方植物戦争記の始まりだな。」

「第七十次世界植物大戦開戦ということですか。」

「そういつことだな。」

赤夜ナチスとはいったい何者なのかは、現時点ではまだ分からない、しかし、トウダイグサ・スカーレット大佐の実力が問われ、そして植物平和連合軍の平和穢しという異変の撤回が、無事に起こせれるのか、今後の展開に期待が高まる。

「そういえば、メイド長いないね。」

「もしかしたら、やばいかもな」

「コニシキソウ三等兵、敵の動きは、どうだ。」

「西の方に32万人の敵がいます。南の方にも30万人ほどいます。」

「ウォー・スタート
戦闘開始」

第二話 開戦前の静けさと云つ不吉さ（後書き）

次回、戦いは二手に分かれの戦いとなった。そして基地に近づく脅威にテリハニシキソウ一匹狼兵は気づくのだろうか

第三話

急激な熱と寒冷なる力（前書き）

テリハニシキソウ一匹狼兵の攻撃にきた。期待。

第三話 急激な熱と寒冷なる力

西の艦隊は、タカトウダイ中佐が選んだ戦士で戦う。

南の艦隊は、俺が選んだ戦士で戦う。

「平和を取り戻すぞー」

「おー」

戦いは、西南で激しく始まった。

「禁忌 クラウ・ソラス」

ぶっ飛ばしが多かった。

「炎符 フォッサマグナの御怒り」

「あいつ、溶岩を操った。」

「化けものだー」

「ふんっ」

戦闘用要塞が一気呵成に溶けた。

さらには、戦闘員まで骨も残さず溶かした。

「溶岩の恐怖は最強なのさ」

「禁忌　クラウ・ソラスEX」

戦闘員を一気に殺した。

戦闘員の血と肉を喰いながら、戦うトウダイグサ・スカーレット大佐の行為は、すさまじく残酷で鬼畜そのものだった。

「平和壊すなら、全員の体も壊してあげる。」

しかし、平和連合基地に脅威が迫り始めていた。

「敵のお出ましか、いいだろう。」

敵は、弾幕の攻撃を避けた。

「なかなか、良いよけ方だな」

「ほめてくれてありがとう」

「名を云え」

「俺様は、燐九だ。」

「透明　　マルシュッ」

身体を透明にしたテリハニシキソウ一匹狼兵は、弾幕を利用した。

「どこへ行きやがった。」

テリハニシキソウ一匹狼兵は、トウダイグサ・スカーレット大佐と通信をとった。

「大佐殿、敵が侵入した。」

「こっちも御取込中で今は、行けない。」

「こちらの作戦で行ってもいいですか？」

「良いだろう、好きなように殺ね。」

「透明 ネットジャスト」

身体を透明化するだけでなく目立ちやすくしている。

「見つけたぜ」

「熱符 クリスタル・ウンゴート」

「煙兌 室戸台風の如何様」

「冷符 クリスタル・モニュー・ゲッサン」

「意識不明の闇鑑」

「透明 マルシュッ」

「二度も通用しないぜ」

「熱冷 中和のエネルギー」

「ぐっ」

「見たか、お前の攻撃は防げ見ものだらけだ。」

燐九の左腹に穴が開いていた。

そして燐九は、倒れて死亡した。

「將軍、西側の軍が退却しています。」

「南側も退却したほうが身の為だよ。」

「禁忌 平和玉」

「ぎゃあー」

南軍も退却した。

しかし、命令に背いた8人の戦士はトウダイグサ・スカーレット大佐のご飯になってしまった。

「ナチス様、これ以上戦ったら我々の戦力が・・・」

そのものは云っている最中に心臓をぶち抜かれ死んだ。

「トウダイグサ・スカーレット大佐か、こいつを倒す方法を考えなければ」

戦争を起こした帝王の全貌が少しずつ、明らかになるうとしていた。

第三話

急激な熱と寒冷なる力（後書き）

次回は、北側から2000人のナチス科兵士が登場するコニシキソウ
三等兵が見たものとは・・・

第四話 獵具事鏡輻（やつかいなできごと）（前書き）

コニシキソウ三等兵が見、思いもよらぬ人質とは？
スペルコード二つ目は、君も錦に染まれ

第四話 獵具事鏡輅鷹（やつかいなできこと）

ナチス科の行動は、依然として、激しいままである。

「錦符 赤と緑のコントラストファイヤー」

ナチス科の者たちは、焼死していった。

「こんなんでは、焼き鳥みたいにこんがりとおいしく焼けました見たいになっているぞ」

「大佐殿、ジョークが最近進化しましたか？」

「コニシキソウ三等兵、次々と来るぞ、俺は違う場所で戦いに行く。」

「大佐殿って意外とs a d i s tだからな。」

30人のナチス科が現れた。

コニシキソウ三等兵は余裕な感じで戦っていた。

その頃、平和連合軍基地では

「魔理沙、タカトウダイ中佐とチェスしたの？」

「結構強いぜ、さすがは軍人だ、作戦を考えるときの集中力が半端ではないよ。」

戦場に戻して

「溺陣 錦と曖昧な力」

全体の8割のナチス科が全滅していた。

「踵符 足爛れる」

コニシキソウ三等兵は、素早く避けた。

「錦紡 怨記の黄泉へ」招待」

謎の人物も避けてしまった。

「何者だ、名を云え」

「わしの名は、たつみごんざ巽禪差だ」

「コニシキソウ貴様に人質を見せてやるよ。PAD長と奇跡巫女だ」

「貴様ー、人質をとるとは卑怯だ。」

「人質を返す条件は、ひとつ。退却をしろ、そうすれば殺さずに解放してやる。」

「大佐殿、問題が起きました。」

「退却してくれと。」

「でなければ人質は赤色に染められます。」

「分かった。」

「退却はするが返さなかったら、空襲でもするからな。覚えとけ。」

「退却するぞ。」

「はっ、大佐殿」

コニシキソウ三等兵は、十六夜昨夜と早苗を心配しつつ、今ある現をトウダイグサ・スカーレット大佐に知らせた。

「そうか、緊急事態だな。」

「相手は、ナチス科です、信用ができません」

「分かっている、だが、異禪差の野郎は、ナチス科の中でも將軍レベルに近い階級の持ち主だ。俺が殺しにかなければな、そいつの血肉と血は美味しそうだからな。」

「大佐殿、サディスティック発言はそこまでにしてください、トラ

「ウマになるんですよ。」

「おっとこれはすまない」

トウダイグサ・スカーレット大佐は、平和連合基地に近づくナチス科の脅威を知っていた。

「30人が、こっちは1500人だ。」

「人質もいる解放する気があるならいい、それが平和連合軍の罠だと知らずに。」

はたして、結果はどうなるのだろうか？

第四話 獵具事鏡輿（やつかいなできごと）（後書き）

次回、人質解放と罫に引つ掛かったナチス科そして、トウダイグサ・
スカーレット大佐の考えは？
お楽しみに

第五話 偽り隠せぬ暗号（前書き）

遂に、人質解放と言いたいところですが、敵の能力に注目

第五話 偽り隠せぬ暗号

平和連合軍基地にナチス科達がいた。

ニシキソウ准尉が

「こいつ等、まさか攻撃したら容赦しないぞ。」

ナチス科と遭ったトウダイグサ科。

「人質を渡せ。」

「良いだろう。渡してやるよ。」

「こいつ、やけに冷静にそんなこと言ってるやがる。」

「錦符」

「やめろ、ニシキソウ准尉！」

トウダイグサ・スカーレット大佐に叱られた、ニシキソウ准尉。

「すみません大佐殿。」

「異將軍、敵がまだいます。」

「心配するな、私が全員殺す。」

「分身解 ニジョン・レック・プロサイド」

巽の分身が、多数に現れた。

「平和　そして誰もいなくなる?」

「錦符　ストレッチサー・チャージ・フルバースト」

二人が、放った弾幕は分身を消していった。

「くそっ」

タカトウダイ中佐は溶岩を固めて、槍にした。

「大佐殿、これを使ってくれ。」

「よっっー」

その槍で、巽の左腹を貫いた。

「がはっ」

トウダイグサ・スカーレット大佐は、その槍をバットみたいに持ち巽を、叩いていた。

「平和、壊すなら貴様を赤に染める。」

巽は、死へと向かって行った。

返り血が、舞っていた。

人質は、ゾツとしていた。

「大佐殿、下手すると好感度が下がりますよ。」

「しょうがないことだろうが。」

「しょうがなくてすよ。」

ナチス科の一人は、テリハニシキソウ一匹狼兵につけ狙われていた。

そして、彼が崖から見たもの其れは、ミステリーサークルみたいなナチス科の基地だった。

「こんなでっかい物があったとは。」

第五話 偽り隠せぬ暗号（後書き）

今回は、遂に基地を発見したが、ミステリーサークルのような基地は何とも言えない形をしていた。次回もお楽しみに

第六話 ナチス科の基地に潜入せよ（前書き）

急展開を迎えようとしています。

第六話 ナチス科の基地に潜入せよ

テリハニシキソウ一匹狼兵は、通信をした。

「トウダイグサ・スカーレット大佐殿、ナチス科の基地を発見しました。潜入する許可を貰いのですが？」

トウダイグサ・スカーレット大佐は、待機しろっという条件で潜入の許可を出した。

20分後にポインセチア中尉が来た。

「潜入するぞ。」

「了解。」

ナチス科の基地は、誰もいない。

あるのは、血の跡だけ。

テリハニシキソウ一匹狼兵はコンピューターを見てみた。

「データの中身を読んでみるよ。ナチス科の者により解釈されて消去されたためない。byデケミソウ科」

デケミソウ科の中に血まみれになったナチス科の一人がいた。

「貴様、ナチス科だな。殺す。」

「落ち着け、ポインセチア中尉。」

ナチス科の一人が不気味に笑いだした。

「デケミソウ科の裏切り者だぜ俺は、ハッハハハハハハハハ」

ポインセチア中尉は苛立ちを見せていた。

テリハニシキソウ一匹狼兵は金属棒を武器倉庫から取り出した。

ナチス科の一人は、笑いながら殺された。

「テリハニシキソウも同じ気持ちになったのか。」

「そうだが。」

「まさか、武器倉庫に、金属棒がまだあったとは。」

「偶然的な感じだな。」

返り血を浴びた、テリハニシキソウ一匹狼兵。

ポインセチア中尉は、ひとつ思った。

ナチス科の一人の頭を粉々にするぐらい腹を立てたということとは、何か彼が殺戮を行う理由に何かが重なったのだろうか。

「大佐殿、ナチス科の基地ではなく第69次世界植物大戦に戦ったデケミソウ科の基地でした。」

「そうか、ナチス科が一人いたか。」

ポインセチア中尉は、知らなかった。

テリハニシキソウ一匹狼兵の記憶にある悲劇を。

第六話 ナチス科の基地に潜入せよ（後書き）

次回は、テリハニシキソウ一匹狼兵が語る、悲しき、記憶とは一体。
次回もお楽しみに

第七話 悲しき記憶 (memory) (前書き)

テリハニシキソウの修行場所で起こった最悪なこととは。
三つ目の、スペルコードは、謎の植物。

第七話 悲しき記憶 (memory)

植物平和連合軍基地。

トウダイグサ・スカーレット大佐は、テリハニシキソウの気持ちをよく知っている。

「テリハニシキソウ、お前の修行場所で何が、あったのか教えてくれ。」

「大佐殿、実は。」

「どうしたんだい。」

「俺の修行場所、すでにナチス科に占領されてしまったんです。」

「なぜ、そんなことが。」

「話せば、少し長いのですが……。」

「話してくれ、作戦の元にもなる。」

「はいっ、俺の修行場所は、とあるお寺で、戦術を着ける特訓をしていました。」

「まだ、お主は、戦術が成り立っておらんぞ。」

「すみません、師匠殿、つい師匠殿となると、気を緩めてしまって。」

「はははは、手加減しなくてよい、本気でこい。」

「とりゃー。」

「動きが、亀だぞナチス科の一人が。」

師匠は、杖でナチス科を吹っ飛ばした。

テリハニシキソウ以外にも、たくさんの戦術修行者がいた。

目的は、いろいろある。

テリハニシキソウ一匹狼は、師匠を物凄く尊敬していた。そしてその他の修行者とは、友達みたいな感じになっていた。

「師匠殿、そろそろ時間です。」

「そうじゃな、コゴミ科。」

夜の寺で、悲鳴が聞こえた。

テリハニシキソウは、気にしていた。

ナチス科の一人が持っているのは、刀としては、いびつな形をしていた。

コゴミ科の部屋に入り込んだ。

「ナチス科、貴様、やめろ・・・」

ナチス科にコゴミ科の一人の血が付いた。

部屋の周りには、肉片や、そぎ落とされた左腕がある。そして周りには、血が飛び散っていた。

そして、ナチス科の一人は、師匠の部屋に入った。

テリハニシキソウは、剣を持っていた。

ナチス科は、師匠をバラバラにしていた。

そして、来たことを知って、師匠の首を切り落とした。

テリハニシキソウは、狂気に満たされて、ナチス科の一人の左腕を切り落とした。

ナチス科は、平然の顔をしていた。

「テリハニシキソウ、いや、トウダイグサの者。ここで、お前も死を迎える。」

「貴様が、ここで死んでもらう。」

ナチス科が、刀で、テリハニシキソウを殺そうとした瞬間。

ナチス科の右首筋から血が出た。

テリハニシキソウが、透明化した時に、斬られたのだろう。

「俺は、この場所を去る。」

テリハニシキソウ一匹狼兵は、お寺を去った。

其のお寺に、誰もいなくなった。

「そんな悲しいことが。」

「大佐殿、ナチス科が、戦車と戦闘機で襲ってきます。」

「分かった。戦闘準備をしろ。」

「俺もいきます。」

「テリハニシキソウ一匹狼兵、よかるう行けばいい。」

「ありがとうございます。」

ナチス科への、戦いが激しくなるうとしていた。

第七話 悲しき記憶 (memory) (後書き)

次回の展開、ナチス科の一人が、植物平和連合基地に忍び込んでしまった。そして、一人のトウダイグサ科の攻撃が初登場。お楽しみ

第八話 血に塗れた平和を part 1 (前書き)

トウダイグサ・スカーレット大佐の行動とテリハニシキソウ一匹狼
兵に注目！

第八話 血に塗れた平和を part 1

ナチス科の戦いが、一層熱くなり始めた。

「平和 血に染まりし其の厄介なる戦争」

トウダイグサ・スカーレット大佐の狂気の弾幕がナチス科の軍一人一人を殺戮の犠牲になっていった。

「平和、守らぬなら殺す。」

タカトウダイ中佐は、地面をたたき割り、溶岩を操った。

「炎符 マグマの中で儂く散れ」

ナチス科が次第に減っていった。

トウダイグサ・スカーレット大佐は、戦車を持ち上げて戦闘機にぶつけた。

そのあと

「禁忌 平和玉」

ナチス科の50人が骨も血も無く消え去った。

ニシキソウ准尉とコニシキソウ三等兵とポインセチア中尉とハツユキソウ曹長は、トウゴマ少佐に連れられて、ある作戦を執行しよう

とじていた。

「少佐、その作戦は。」

「ナチス科の内部に入り込み、赤夜ナチスをコテンパンにしてやる方法だ。敵は後ろに回ったことに気が付かない、其処を狙っていく。」

「お前ら五人では人手不足だろ。」

「テリハニシキソウ一匹狼兵。」

「その作戦は、方法としては行けるが厄介者がいることも考慮に入れば、うまくいく。」

作戦実行した。

トウダイグサ・スカーレット大佐とタカトウダイ中佐が六人が作戦実行に入ると聞いた。

「うまくやってくれますよね？大佐殿。」

「それを願うまでだ。」

植物平和連合基地に入ってきたナチス科の3人。

「ここを破壊すればいいって聞いたがうわあ。」

一人がトラップに引っ掛かった。

それは、トウダイグサ科の中でも頼もしいトラップの戦主。ヤドク
キリン准佐だ。

彼が投げた斧は、捕まえたナチス科の一人の足を切断した。

「ひえーこいつに殺されたくないー。」

「こっちにもいた。」

セイシボク戦力調整兵が、ナチス科の2人の心臓を貫いた。

「お見事。」

「まあーな。」

part 2に続く

第八話 血に塗れた平和を part 1 (後書き)

次回は、この物語の part 2 です。お楽しみに

第九話 血に塗られた平和を part 2 (前書き)

戦いの続きです。

第九話 血に塗られた平和を part 2

トウダイグサ・スカーレット大佐は、何かを考えていた。

タカトウダイ中佐は、戦いで疲れが見え始めた。

他のメンバーも、苦しい感じになってきた。

ナチス科の要塞。

六人のトウダイグサ科が、ナチス科の誰も通らない場所を通っていた。

「正解だが、蜘蛛の巣が張り過ぎて、困る。」

「少し黙れ、ニシキソウ准尉。」

「この辺りから、残酷を極めるぞ。」

「突入。」

そして、ナチス科の600人と対決になった。

「暖符 眠れるこの灼熱地獄」

60人ほどが、やけど程度ではすまなかった。

ニシキソウ准尉のスペルカードが発動した。

「錦凸 ジュカンゼン・ルート・デス」

砕かれた地面の破片が、弾幕のようにナチス科を襲った。

ナチス科の600人は、350人に減っていた。

トウダイグサ・スカーレット大佐は、狂気の声でナチス科の700人を恐がらせた。

「君達は、平和を好まないなら俺の紅き平和願望七条約がてめえらを裁く。」

「平和の鐘を、時を止める。」

平和の鐘が、時間を止めた。

「平和 死と獄の喝采」

そして、平和の鐘が鳴りだした。

「時は、動く。」

ナチス科の700人全員の立っている、地面から弾幕が放たれて跡形もなく消えた。

トウダイグサ科の六人は、疲れていた。

「数が多すぎる。」

「600人は、俺達にはつらすぎる。」

「ならば、俺が行こうか。」

「赤夜ナチスか？」

「將軍じゃない、俺の名は、まついさへんらのみち娶持澤羅真野嬬だ。」

「いつから、やばい空気がする。」

part3に続く

第十話 血に塗られた平和をpart3(前書き)

part3で終わりです。

第十話 血に塗られた平和を part 3

敵は、相当強そうな声でトウダイグサ科の六人に怒鳴りを入れた。

「貴様等は、そんなにナチス科に恨みがあるのか。そうならば死にさらしてやる覚悟しろ。」

トウダイグサ科の六人は、スペルカードで一気に攻撃をした。

「錦符 リード・ゼッドマックス」

「錦鐘 轟きの風に揺れる色錦」

「紅聖 クリスマスの陣罪」

「雪加減は如何？」

「ダークネス・フォール」

「寒冷 涙凍りし」

六人のトウダイグサ科は、ナチス科の一人に攻撃を浴びせた。

植物平和連合軍基地

「タカトウダイ中佐、大佐殿からあることが命令されてます。」

「この作戦は、トウダイグサ科の六人を退却させて、その後に植物天征・阿修羅を放つという作戦。」

「植物天征・阿修羅は、8平方キロメートルの島を跡形もなくすほどの破壊力を持つレーザー型弾幕。そんなものを放つことは、ナチス科の要塞は一気呵成に消滅することではないか。」

六人のトウダイグサ科は、命令通りに退却した。

其の40分後に、レーザー弾幕が解き放たれた。

「最強禁忌 植物天征・阿修羅」

阿修羅の形をしたレーザー弾幕は、一気にナチス科の要塞に当たった。

そして、その要塞は、跡形も無く消えてなくなった。

「大佐殿、どうですか？」

「あの攻撃は、俺にとって疲れる技だ。」

「今回の戦いは、さすがにしんどい。」

ナチス科にとって、ひとつの要塞を失ったことと、かなり強い人物も死んだことにより大きな被害を受けた。

東方植物戦争記は、第一シーズンの終わりを見せた。

しかし、第二シーズンからは、新たな新展開が起こり植物達がやってきた平和活動に亀裂までも入ろうとしていた。

第十話 血に塗られた平和をpart3 (後書き)

第二シーズン、新たにセツナ科とシシゴ科の敵植物も加わり、さらに複雑化していきます。

また、この東方植物戦記は、環境と平和の美化を願って作られています。ご存じ願いますことよろしく願います。

第十一話 新たな敵迫りくる敵そしてまた新しい敵(前書き)

セツナ科とシンゴ科という敵軍も加わった。season2。ナチス科までも来るといふ、そうそれは三つ巴ならぬ四つ巴の戦い。

第十一話 新たな敵迫りくる敵そしてまた新しい敵

植物平和連合基地は、少しだけ平和を味わっていた。

なぜなら、ナチス科の攻撃が小康状態であるためだ。

「大佐殿、強いですねー。」

「動きは、素早く。」

どうやら、チェスをしていたようだ。

ナチス科は、70000機の戦闘機と600万人の戦闘員と20人の隊長と呼べる軍団がいた。

新たな敵軍、セツナ科は、6万9200機の戦闘機と700万人の戦闘員と5人の隊長がいたる

シンゴ科は7万2千機の戦闘機と650万人の戦闘員と500人の隊長がいた。

植物平和連合軍は、そのことに気が付いた。

こんな状態は、絶望を感じるようだが、トウダイグサ・スカーレット大佐は、魔剣クラウ・ソラスをとりだした。

「禁忌　　デス・サインド・キルイング」

敵軍は、シンゴ科の戦闘機を落とそうとしている最中にトウダイグサ・スカーレット大佐の弾幕を受けた。

セツナ科の戦闘機は、植物平和連合軍基地人間保護室を破壊しようとした。

バラ大將が、ナイフを投げた。

戦闘機のエンジン部分にナイフが入り込み、まるでバードストライク現象のような感じでエンジン部分が大破した。

ナチス科とセツナ科は、苛立ちで攻撃をしていた。

「この俺が、最強の戦争主義の植物軍団だ。」

「俺こそがな。」

トウダイグサ・スカーレット大佐は、元氣玉のような球体を投げた。

「禁忌 平和玉」

すごい爆発音とともに、一気にタカトウダイ中佐が溶岩槍を戦闘員に突き刺していった。

この戦いは、ただナチス科の栄光を盗みに来た者達による戦争であることがまだ、みんなは知らない。

第十一話 新たな敵迫りくる敵そしてまた新しい敵（後書き）

次回の戦闘の中で、物凄く残酷なシーンがありますのでご注意ください。

次回もまた見てね。

第十二話 靡いた血と残酷的戦争

ナチス科の一人は、植物平和連合基地に行こうとしていたがトウダイグサ科の一人、コニシキソウ三等兵が作ったトラップが引っ掛かった。

トウダイグサ・スカーレット大佐とナツトウダイ・スカーレット軍曹とトウゴマと他の兵士たちがセツナ科の要塞を1つ壊した。

トウダイグサ・スカーレット大佐は、見事に投げた平和玉。

一気呵成に壊れた戦闘機100機。

トウダイグサ・スカーレット大佐は、ある作戦を思いついた。

「平和目指す為に、狂気の嵐でも起こすかな。」

「大佐殿、ナチス科とセツナ科とシンゴ科が退却していきます。」

「どういふことだ。簡潔に説明しろ。」

「私にもわかりません。」

ナチス科は、植物戦争記に大変な戦いになる。

そして植物平和連合軍は、人間界が壊れかけていることを知る。

タカトウダイ中佐は、嫌な予感をしていた。

第十二話 靡いた血と残酷的戦争（後書き）

次回、東方植物戦争記第十三話十字架に架けられた心をお楽しみください。

第十三話 十字架に架けられた心（前書き）

暗号解読。タカトウダイ中佐に????????????????ある。

第十三話 十字架に架けられた心

タカトウダイ中佐にとって、ナチス科の一人、リリリーグソウは、最大の敵である。

なぜなら、水の力を操るからである。

トウダイグサ・スカーレット大佐は、セツナ科と戦っていた。

他の軍も、セツナ科とシンゴ科と闘っていた。

タカトウダイ中佐と他の植物軍は、ナチス科と戦いを始めていた。

タカトウダイ中佐は、炎をリリリーグソウにぶつけようとしたが水の力の前に消されてしまった。

リリリーグソウは、笑って言った。

「貴様の攻撃がその程度なら、俺は強いということになるぜ。」

タカトウダイ中佐には、秘策があった。

（あいつに油をかければ、攻めれやすい。）

タカトウダイ中佐は、リリリーグソウの不注意を見つけた。

そして、油をかけた。

リリリーグソウは、水の力が出ない。

「くそ、油をかけるとは卑怯だ。」

タカトウダイ中佐の作戦が当たった。

「炎符 奇妙百楼」

リリリーグソウは、炎まみれになった。

そして、リリリーグソウは焼死した。

「不足だったことは、欠点で見つけれる。」

第十三話 十字架に架けられた心（後書き）

次回は、第十四話コニシキソウニ等兵鬼と化す。お楽しみに。

第十四話　コニシキソウ三等兵鬼と化す！（前書き）

暗号を解読せよ。?????と?????の死にコニシキソウ三等兵は怒りのあまり?????になってしまった。

第十四話　コニシキソウ三等兵鬼と化す！

コニシキソウ三等兵と他の二人は、ナチス科の建てた火力発電所を壊しに行った。

何故か、ナチス科の四人は、大富豪をしていた。

「奴等、のんきに大富豪をやっているぞ。」

「ほつといた方がいい。」

「コニシキソウ三等兵の言うとおりだ。」

「大佐殿の命令で来ているんだからな。」

コニシキソウ三等兵は、すごいことを言った。

「そうだ、奴等に現実のはばぬきを教えてやろう。」

そして、ヒメチドメ四等兵は、特攻弾幕の準備をした。

その間に、コニシキソウ三等兵とセイタカアワダチソウ兵長は、火力発電所に向かった。

火力発電所のところに、カギと呼ばれるナチス科がいた。

コニシキソウ三等兵は、セイタカアワダチソウ兵長と二手に分かれて行動をとった。

ヒメチドメ四等兵は、裏を読まれてしまった。

「プラントソルジャーソウルを喰らえ。」

ヒメチドメ四等兵は、手榴弾を投げた。

しかし、不覚にも敵が後ろにいた。

ヒメチドメ四等兵は、頭と首と胸を貫通させられて死んでしまった。

セイタカアワダチソウ兵長は、敵の罠に引っ掛かり、上半身を粉々にされてしまった。

コニシキソウ三等兵は、カギと対決していた。

「カギ隊長、平和連合軍の二人を処理しました。」

コニシキソウ三等兵は、自分の過ちで、コミカンボク特殊兵を殺してしまったことを思い出した。

怒りとストレスが混じりにまじりあい、コニシキソウ三等兵は、鬼になった。

「殺戮符 拷問の欠片」

カギの左目が抉られた。

「なんだこいついきなり強くなりやがった。」

コニシキソウ三等兵は、素早い動きで弾幕を放った。

カギは、血だらけになって命を落とした。

そして、正気に戻ったコニシキソウ三等兵は、火力発電所の53か所に爆弾を設置して爆破した。

二人を惜しく失くしてしまったが、この戦いによりコニシキソウ三等兵は、強くなった。

第十四話 コニシキソウ三等兵鬼と化す！（後書き）

次回、第十五話 コミカンソウ昇格です。お楽しみに。

第十五話 コミカンソウ昇格（前書き）

暗号を解読せよ。名セリフを思い出した、?????大佐。そのな
いよつとは

第十五話 コミカンソウ昇格

戦いは、一週間ほどの平和に変わっていた。

コミカンソウ上等兵は、兵長に昇格した。

この結果、いろんなことが変わるとタカトウダイ中佐が言った。

トウダイグサ・スカーレット大佐は、あることを思い出した。

「俺が、第六十九次世界植物大戦を平和に変えたものであり、人間界から言わせてもらおうと暦は、1523年から2009年ぐらいだ。俺は、その戦争を終わらせるためにこう言ったのだ。我々が戦争を行うから、我が後輩である人間達に戦争を教えてしまったのだ。その過ちを二度と繰り返したくなければ、平和を剣に変えて愚かな戦争を断ち切るしかない。平和と戦争を繰り返す植物界が甚だしく見える。其れが運命ならあがなおうじゃないか。我々が平和であれば人間界も平和になれる。そうすれば、私達植物は、平和連合軍を作る。反対する者はいないか？しないのなら平和に過ごすことだ。」

霊夢と魔理沙は、感動していた。

何故か、テリハニシキソウ一匹狼兵の手には、深いいーのあのスイ

ツチがあつた。

ナチス科の襲撃は、いつ来るかわからない。

それだけでなく、セツナ科とシンゴ科の軍団もいる。

もはや、三つ巴どころか四つ巴になってしまっている。

この戦いは、永遠の平和を目指す為の最後の一步である。

トウダイグサ・スカーレット大佐は、この戦いが終わったら植物たちで盛り上がる予定らしい。

「コニシキソウ三等兵。」

「どつしたんですか？中佐殿。」

「シンゴ科の野郎どもがこっちに来ている。」

「平和振興のためなら、戦いに終止符を打つしかないのですよ。」

「さすが、コニシキソウ三等兵。ずいぶんと成長したな。」

「はいつ、いずれ自分も大佐殿のような熱血感あふれる平和主義者になりたいと思っています。」

（確かに、大佐殿は、平和主義者だが大佐殿の平和主義は、天ボボの平和主義態度と紅魔館にいる吸血鬼の狂気が混ぜ合わさった形になっているんだけど……）

タカトウダイ中佐は、そう思いながら大佐殿の方へと向かった。

第十五話 コミカンソウ昇格（後書き）

次回、悟れなき憂鬱。お楽しみに。

第十六話 悟れなき憂鬱（前書き）

暗号を解読せよ。タカトウダイ中佐に戦いに関する?????が
あった。

第十六話 悟れなき憂鬱

シンゴ科の軍団は、6000機の戦車を持ってきていた。

ナツトウダイ・スカーレット軍曹は「戦闘機がないということは、第六十五次大戦のことを思い出す。はあー。」

かなり落ち込んでいた。

それはそうと第六十五次世界植物大戦とは、紀元前2年から西暦89年まで続いた戦争。

トウダイグサ科が初めて敗戦となった戦いである。

それは、相手の作戦が興味深い作戦の実行の仕方であり、そのせいで敗北になってしまった。

タカトウダイ中佐のもとにいた兵士は、次々と猟奇的な殺され方をされてしまいタカトウダイ中佐は、そのせいで仲間を失いたく無くないという気持ちになりトラウマになっていた。

つまり、今回は其れに酷似していた。

タカトウダイ中佐とトウダイグサ・スカーレット大佐は、作戦に入った。

植物平和連合基地から弾幕ミサイルを放って、逃げている者達を倒すという作戦だった。

実行したが、テリハニシキソウ一匹狼兵がいた。

「作戦に少しだけミスなんてないが心配になったのか？」

「大佐殿、シンゴ科の背後50マイルにセツナ科の軍隊がやってきているんですよ。」

トウダイグサ・スカーレット大佐は、作戦実行を行った。

弾幕ミサイルは、シンゴ科だけでなく遠く離れたセツナ科に届いた。

意外なことにセツナ科は退却をした。

シンゴ科の5,000人は、植物平和連合基地を襲おうとした途端、トウダイグサ科最強8人衆が出陣した。

トウゴマ大尉は、すごい行動に出ている。

多量出血した敵に毒を植え付けて殺すというサディスティックな行動であった。

トウダイグサ・スカーレット大佐は、敵の頭蓋骨を集めていた。

「こいつらで、平和を壊した奴10億号目だ。」

やがて、シンゴ科も退却した。

トウダイグサ・スカーレット大佐は、シンゴ科が落としていった謎の軍事プログラムが収録されたCDを見つけた。

「なんだが、面白そうなものが手に入ったぞ。」

第十六話 悟れなき憂鬱（後書き）

次回、軍事プログラムの中身、を楽しみください。

第十七話

軍事プログラムの中身(前書き)

暗号を解読せよ。?????という真実。?????は、平和主義者にどう響くのか？

第十七話 軍事プログラムの中身

トウダイグサ・スカーレット大佐の持つてきたCDは、ナチス科の軍事勢力の情報と平和壊しの情景の創造が刻まれたものだった。

「我々、ナチス科は、人間界で負けたことを悔やみ、植物界の世界を支配することを決意した。植物界とは、もうひとつの幻想郷。自らの戦いを人間に見せないようにするため、オーラ（結界）を張った。しかしナチス科が侵入してきたせいで、結界は、少しだけ崩れてしまった。その結果、新たな戦争を人間に教えてしまった。そのことまでは、順調に進んだ。植物界を占領すれば我々の軍事態勢で、他の場所も崩すことができる。我々は、赤夜ナチスを将軍として崇めている。戦いの基準に合わせれば見事な社会主義勢力が作れる。しかし、植物平和連合軍の中で一番厄介なトウダイグサ科を潰さなければ世界死滅作戦を実行できない。あいつらは、民主主義の平和を作ろうと企んでいるからだ。」

トウダイグサ・スカーレット大佐は、冷静な言葉を吐いた。

「民主主義と社会主義か、俺達は、望んでいるのは民主主義で、社会主義はナチス科か。ナチス科を少しずつ削った方がいいな。」

タカトウダイ中佐にもあることがあった。

「シンゴ科やセツナ科の処理も必要ですね。」

「そうだよ。奴等も潰す対象になっているんだ。」

「コニシキソウ三等兵が強く叫んだ。」

セツナ科の一人がテリハニシキソウ一匹狼兵と闘っていた。

「おのれの、力は弱いな。」

「舐めやがって殺してくれる。」

「透明 スラッシュユッ」

「消えただと。」

「温暖 髑髏の熱帯夜」

「ぎゃー…！」

セツナ科の一人は、腹と胸と頭を抉られて倒された。

テリハニシキソウ一匹狼兵の力は、未知数である。

トウダイグサ・スカーレット大佐に並ぶ強さとも言われている。

「ナチス科の襲撃の臭いがプンプンするぞ。大佐殿に報告しよう。」

第十七話

軍事プログラムの中身（後書き）

今回は、血みどろのナチス科、をお楽しみくださいと感想を宜しく。

第十八話

血みどろのナチス科（前書き）

少しだけ、スランプになっていました。

第十八話

血みどろのナチス科

ナチス科は、最強作戦の一部実行しようとしていた。

それは、シンゴ科を絶滅させて、セツナ科の一人を人質にしておいて、植物平和連合軍がこの作戦を考えた。

それを伝えたという卑劣な作戦である。

「大佐殿、ナチス科の嫌な作戦が匂います。」

テリハニシキソウ一匹狼兵が報告してきた。

トウダイグサ・スカレット大佐とタカトウダイ中佐は、ナチス科の卑劣な作戦を知った。

「そんな作戦があつたのか！」

「ニシキソウ准尉とトウゴマとポインセチアとハツユキソウでナチス科の包囲を頼む。」

「了解。」

ニシキソウ准尉達は、ナチス科の作戦を阻止すべく平和連合軍の作戦を実行した。

セツナ科とシンゴ科がやってきていることも知らずに。

タカトウダイ中佐とトウダイグサ・スカーレット大佐は、嫌な予感がしていた。

コミカンソウとオオニシキソウとボロジノニシキソウとナガエコミカンソウとともに、ニシキソウ達のいるところに向かった。

第十八話

血みどろのナチス科（後書き）

次回は、苦戦の狭間 part1です。お楽しみに

第十九話 苦戦の狭間 part 1 (前書き)

このお話でいったん season 2 が終わり season 3 に向かいます。トウダイグサ・スカーレット大佐がとうとう平和を狂気の名に変えて暴れます。

第十九話 苦戦の狭間 part 1

テリハニシキソウ一匹狼兵は、ナチス科の兵士50人を相手にしていた。

「暖房 心よ穢れよ」

「寒冷 身を凍らせる恐怖」

兵士は、倒されていた。

「これぐらいかな。」

植物平和連合軍基地では、トウダイグサ・スカーレット大佐が周りの様子を見ていた。

「大佐殿、やはり気になることがあるのですか？」

タカトウダイ中佐は、心配になり言った。

「大丈夫だ、ちょっと自然と精神統一していただけ。」

ナチス科の戦闘機と戦車がやってきた。

トウダイグサ・スカーレット大佐はね参加することを決意している。

この戦いは、平和がまさかの狂気になり、無数の骨と肉片と血液が飛び散るといふことになるとは。

トウダイグサ・スカーレット大佐は、スペルカードを出した。

「平和 平和壊したらドカーン」

「禁忌 平和玉」

「平和 そして誰もいなくなる？」

「禁忌 クラウ・ソラス」

「平和 525年の決意」

「禁忌 おふざけは許さない」

ナチス科の軍隊が全滅した。

「トウダイグサ、お前が倒したのは、第一波だ。ハハハハハ」

トウダイグサ・スカーレット大佐は、平和の狂気を使い戦車を壊した。

「タカトウダイ中佐、こちらへんに散らかっている肉片や俺が集めた血液をとある館に寄付してくれ。頼むぞ。」

「了解大佐殿。」

ナチス科の第二波が、襲ってきているとは知らずに。

シンゴ科とセツナ科が来ようとしていた。

第十九話 苦戦の狭間 part 1 (後書き)

次回は、苦戦の狭間 part 2です。お楽しみに

第二十話 苦戦の狭間 part 2 (前書き)

緊急告知があります。とても重要なことです。

第二十話 苦戦の狭間 part 2

シンゴ科とセツナ科がやってきた。

トウダイグサ・スカーレット大佐は、ナチス科の第二波がやってきてしまった。

タカトウダイ中佐は、あることを考えた。

「大佐殿、聞こえますか？」

トウダイグサ・スカーレット大佐は、返事をした。

「ああ、聞こえるぞ。どうしたタカトウダイ中佐。」

「一気に殲滅する装置を働かせます。大佐殿皆さんを撤退させるよう命令したらどうでしょうか？」

「分かったやね。」

「了解。」

トウダイグサ・スカーレット大佐は、全員を撤退した。

ナチス科の一人は、こう思った。

「俺達が恐くて、連合基地に逃げ込んだな。」

そして、トウダイグサ・スカーレット大佐とナツトウダイ・スカーレット軍曹は、タカトウダイ中佐の言論を聞いてやってきた。

「タカトウダイ中佐、何事だ。」

「大佐殿、この装置は、この小説、東方植物戦争記の二週間合計2月26日～3月12日までに合計アクセス数が、500行かないと発射されません。って書いてあるのですが・・・」

「これは、この小説を見てくれるみんなと協力する番だ。」

さあ、遂にみんなと協力できる小説がここに降臨したぞ。

みんな、暇じゃなくてもいいので、とにかく、二週間の間に500

アクセスをしてくれ。

でなければ、東方植物戦争記のバッドエンドか、訪れてしまう。

トウダイグサ・スカーレット大佐や植物平和連合軍の為に、殲滅符
完全排除装置を動かしてくれ。

第二十話 苦戦の狭間 part 2 (後書き)

活動報告にも、入れて全員参加型(東方projectを知る人のみ)です。

番外編 植物平和連合軍の変な一日（前書き）

番外編を作ってみました。厳密に言えば500アクセスを獲得せよというのは番外編の次のお話以内ということですが。コメディ風味なので気楽に読めます。

番外編 植物平和連合軍の変な一日

トウダイグサ・スカーレット大佐は、奇妙ないたずらを企んでいた。其れは、タカトウダイ中佐の頭上にたらいが落ちてくるように設置をしていた。

実は、トウダイグサ・スカーレット大佐は、意外とバカ殿みたいな行動に出ることがあり、その時は、冷静な感覚はなく、天然である。

「大佐殿、今回は……」

「アヒヤヒヤ、引っ掛かった。」

「コラー大佐殿、これで2500回目だー。」

ニシキソウ准尉とコニシキソウ三等兵は、苦笑していた。

テリハニシキソウは、ハマタイゲキと話していた。

「予算は、考えているかもな。」

「ただ、今回ときたら、高いぜ全く。」

「さすがに、ナチス科の兵器に対抗できる武器を作るには、リスクがあるからな。」

トウダイグサ・スカーレット大佐は、タカトウダイ中佐に説教されていた。

というよりも、普通なら上が下を注意するのが基本だが、下が上を注意するというのは、不愉快なことである。

終わり

番外編 植物平和連合軍の変な一日（後書き）

次回から、まともなおはなしです。

第二十一話

苦戦の狭間

part 3 (前書き)

アクセス結果は、500アクセスを余裕で超えたのでバッドエンド
はありません。

第二十一話

苦戦の狭間

part 3

「大佐殿、発射準備完了です。」

「よしつ、殲滅符完全排除装置を発射しろ。」

「コニシキソウ三等兵は、どうする？」

「知らないね。」

「宴が来るぜ。」

「大佐殿、発射ボタンを。」

「分かった。」

ぼちっとボタンを押したトウダイグサ・スカーレット大佐。

殲滅符完全排除装置が、勢いよく発射の準備に入った。

ナチス科とシンゴ科とセツナ科は、必死になって、攻撃をしたが、植物平和連合軍がシールドを張っていた。

「シールドの一部に、穴を入れる。」

「分かりました。中佐。」

シールドに穴があいた後、殲滅符完全排除装置がビームを解き放った。

ビームは、65分割した後、さらに1000分割した。

トウダイグサ・スカレット大佐が緊急事態の時、使用すると言っている殲滅符完全排除装置は、植物平和連合軍のPlant Sou1が、弾幕となって出ると言っている。

機械だらけの植物界に植物を取り戻す為に。

Plant Sou1が、稲妻のようにナチス科、シンゴ科、セツナ科を襲い始めた。

「これは、防ぎきれない。」

「シールド解除、戦闘体制に入れ。」

トウダイグサ・スカーレット大佐は、命令を出した。

自らも、戦いに参戦した。

「禁忌 平和玉」

「錦盤 残暑の蝉しぐれ」

「残短 月の言う静かなる海」

「雪符 集中豪雪」

数々の弾幕が、ナチス科とシンゴ科とセツナ科は全滅した。

しかしまだ残りがいる。

弾幕により、崩壊した機械達。

血塗られた場所は、平和に染まり始めていた。

「トウダイグサ・スカーレット大佐の奴、あんな秘密兵器を持っていたとは。」

「どうしますか、シンゴ將軍？」

「ナチス科を落とす。」

「分かりました。」

植物界に幾度目の平和が訪れるかはまだわからない。

ナチス科は、最悪兵器を作り上げていた。

此の植物戦争に終止符があると信じて、トウダイグサ・スカーレット大佐はいる。

この戦いを見守っていただきたい。

第二十一話

苦戦の狭間

part 3 (後書き)

今回は、鼓動揺らす平和のヒント、です。お楽しみに

第二十二話 鼓動揺らす平和のヒント（前書き）

平和に導く、重大なことをポイントが知ることとなる。

第二十二話 鼓動揺らす平和のヒント

植物平和連合軍基地

コニシキソウ三等兵とスベリヒユ中佐とマツバボタン准尉とハゼラ
ン曹長と情報交換をしていた。

「トウダイグサ科も、ナチス科の情報をたくさん持っているとは大
助かりです。」

「スベリヒユ科は、ナチス科のほかに、シンゴ科とセツナ科の軍団
を調べていたとは良いことです。」

「一つだけ気にしているのは、ナチス科が不正平和を目指している
ことは一致していることだな。」

タカトウダイ中佐は、コバンソウ上等兵と話していた。

「コバンソウもいろいろ調べているんだなすごいぜ。」

「イネ科のコバンソウ属でリーダーである俺ですからこれぐらい調
べて当たり前です。」

「まっ、少しぐらいの情報は、渡せれるからな。」

コミカンソウとハツユキソウとユーフォルビア・アンカレンシスとシナアブラギリとカンコノキとヤンバルアカメガシワとオトギリバニシキソウとフィランサス・デビリスは、仲良くUNOをしていた。

ポインセチアは、ある書類をトウダイグサ・スカーレット大佐に見せていた。

「これは、平和に近づく一歩になるぞ。」

ポインセチアは、決心をしていた。

昇格のチャンスだと知っていた。

そんな中、シンゴ科は最後の作戦を練っていた。

トウダイグサ科潰しの為に。

ナチス科基地

「今宵を破壊する装置が完成した。試しにシンゴ科を絶滅させる。」

「すばらしいですね、将軍。」

次回の展開がさらなる事態を招く。

第二十二話 鼓動揺らす平和のヒント（後書き）

次回は、ナチス科の極悪作戦を潰せ。お楽しみに。

第二十三話

ナチス科の極悪作戦を潰せ（前書き）

シンゴ科に危機が迫り始めた。

第二十三話

ナチス科の極悪作戦を潰せ

シンゴ科の基地は、とても大きい。

「シンゴ將軍、ナチス科の奴等が来ます。」

「戦闘態勢に入れ。」

「了解。」

ナチス科は、シンゴ科が戦闘態勢に入っていることを見て容易だと思っただ。

「ナチス將軍、シンゴ科絶滅作戦を実行しますか？」

「良いだろう。殺れ。」

「了解しましたナチス將軍。」

ナチス科は、危険な殺戮音波で、シンゴ科の大半を全滅させた。

「かかれー」

ナチス科の軍団は、シンゴ科の基地に入り込んだ。

ナチス本人も入ってきた。

シンゴは、大きめの刀を用意していた。

ナチスとしとうを繰り広げる為に。

植物平和連合軍は、嫌な気持ちで漂っていた。

「大佐殿、気分が悪くなりますよ。」

「ナチス科が、究極の作戦を立ててるに違いない。」

第二十三話

ナチス科の極悪作戦を潰せ（後書き）

次回は、シンゴ科絶滅。お楽しみに

第二十四話

シンゴ科絶滅（前書き）

ナチス科の新兵器は、相手のシールドをうち破る力もあった。

第二十四話

シンゴ科絶滅

シンゴ科の一人が、ナチス科を次々と殺していった。

しかし、ナチス科の一人に銃殺されてしまった。

「シンゴ將軍、シールドの準備は、どうしますか？」

「ナチス、やめろ。」

シンゴに質問した、一人のハミガキグサは、撃ち殺されてしまった。

シンゴは、斧でナチスの足を崩し切ろうとしたが、ナチスは、巨大な鉈を持っていた。

ナチスは、鉈を振った途端、シンゴの上半身が、消えうせた。

時間が経過した後、シンゴ科が全滅してしまった。

一方、セツナ科は、あるものを見て警戒していた。

それは、植物平和連合軍の秘密兵器がまだあることを知っていた。

「じいじは、やばいな。」

第二十四話

シンゴ科絶滅（後書き）

次回は、タカトウダイ中佐の大任務。お楽しみに

第二十五話

タカトウダイ中佐の大任務（前書き）

この任務は、最終回につながるものであった。

第二十五話

タカトウダイ中佐の大任務

トウダイグサ・スカーレット大佐は、セツナ科と交渉して、彼等を植物平和連合軍にとりいれた。

タカトウダイ中佐の大任務は、トウダイグサ・スカーレット大佐が出した任務。

其れは、ナチス科に宣戦布告することである。

ナチス科の150人の兵士を、タカトウダイ中佐は見つけた。

爆弾を投げた後に、メッセージボトルを軍の基地に投げつけたものも、これらも爆弾である。

ナチスは、其の手紙を見て植物平和連合軍を襲うことを決意した。

トウダイグサ・スカーレット大佐は、この戦いを早く終わらせるためにさらなる秘密兵器を用意していた。

この作品が、最終回を迎えるまでに、1000アクセスを超えなければ発動しないマシンだった。

「みんな、これが最後の戦いだ。踏ん張っていくぞ！」

「オー！」

植物戦争の終止符は打たれるのか？

ナチス科の恐怖を打ち砕くことが出来るのだろうか？

最終回が近づく東方植物戦争記にご期待ください。

第二十五話

タカトウダイ中佐の大任務（後書き）

次回は、古から続いた戦争^{めいそうい}。お楽しみに

第二十六話 古から続いた戦争（あらそい）（前書き）

最後の戦いが迫る中、ニシキソウ准尉は、少しでも困ることがあった。

第二十六話 古から続いた戦争（あらそい）

ナチス科が、特別鑑賞団を派遣し始めた。

トウダイグサ・スカーレット大佐は、イネ科とキク科とオクナ科とミズコケ科と協議を開始した。

「今回は、永く続き過ぎた夜を一気に夜明けに帰る時が来た。」

「オオミズコケ大尉は、何か掴めましたか？」

イネ科のチカラシバ工作兵が質問をした。

「申し訳ない情報がつかめず。」

キク科のアフリカキンセンカ上等兵は、気に食わない表情だ。

トウダイグサ・スカーレット大佐は、偵察兵いることを確認したとたん彼等を潰す、小隊を作り出した。

「ニシキソウ准尉、ヤマイバラ上等兵率いるバラ亜網で位の低い兵士たちを動かせ。」

「了解！」

コニシキソウ三等兵達も参加した。

ツゲ科の代表、ツゲ中佐は、トウダイグサ・スカーレット大佐と話していた。

「自分もトウダイグサ目に位置しますので、この際、大佐殿が掴んだ情報を分けてくれませんか？」

「良いだろう、パンダ科にも伝えてくれ。」

「パンダ科も確かに、トウダイグサ目の一員ですからね。」

トウダイグサ科は、少しだけ混乱していても、大佐の行動が次第に分かってきた。

シモンジア科のリーダーが、慌ててトウダイグサ・スカーレット大佐にやってきた。

「騒々しいぞ。」

「すみません、良い情報と悪い情報がありました。」

ホホバという大佐より1階級上の者である。

「良い情報は、偵察兵が全滅しました。悪い情報は、殺戮音波の件です。其の兵器をナチス科が所有していました。」

「君も、我々と同じ目にいってよかった。御苦労である。」

ホホバは、少し喜んでいた。

「平和、導けるならトウダイグサの仲間達を要請しろ。急いでみんなを呼べ！」

トウダイグサ・スカーレット大佐は、みんなを呼び出した。

第二十六話 古から続いた戦争(あらそい)(後書き)

次回は、植物たちの永夜抄。お楽しみに

第二十七話 植物たちの永夜抄（前書き）

最後の戦いに向けて、トウダイグサ・スカーレット大佐が赤夜ナチスを倒す作戦始動へ！

第二十七話 植物たちの永夜抄

「植物たちは、これまで人間に戦争を教えてしまったことをひどく後悔した。その罪滅しでもあり、この戦争という永夜抄をぶち破るうではないか！」

植物達は、歓声を上げた。

ナンヨウサクラとニシキアカリファは、トウダイグサ・スカーレット大佐と言った代表達が来るまで作戦会議室で、準備をしていた。

「終わるねこれで。」

「平和のためなら、死ぬ気でやらねばな！」

ナチス科は、次第に近づいてきた。

トウダイグサ・スカーレット大佐は、スベリヒユの代表と一緒に屋上へ向かった。

ニシキソウ准尉とコニシキソウ三等兵は、殺人音波を破壊する装置を用意した。

「1000アクセスではなく500アクセスだけでも、こいつを撃てるように改良した。」

「うまくいけば、ナチス科を全滅させれる。」

トウダイグサ・スカーレット大佐からコミカンソウにあることを言われる。

「この戦争が終わったら、きみたちコミカンソウ属を科にしよう。」

「トウダイグサ目ですか？」

「ああ、トウダイグサ目にしてあげよう。」

「とても光栄です。大佐殿！」

ナチスは、ニヤリとしていた。

第二十七話 植物たちの永夜抄（後書き）

次回は、絶望を超えて。お楽しみに

第二十八話 絶望を超えて（前書き）

最終回まであと少し、さあ戦いの行く末を見届けよう。

第二十八話 絶望を超えて

ナチスは、遂に殺戮音波を取り出した。

「発射用意をしろ！」

「了解。」

ナチス科達が騒がしい。

トウダイグサ・スカーレット大佐は、敵軍の怪しい空気を見て分かった。

「ナチス科は、殺戮音波を用意している。こちらは、それを妨害するぞ。」

タカトウダイ中佐は、500アクセス溜ったことを確認した。

「発射開始！」

最強兵器は、ナチス科の殺戮音波機を破壊するだけでなく、戦艦も破壊した。

「クソー！トウダイグサ・スカーレット大佐、貴様は俺が殺す。」

ナチスはいらついていた。

植物平和連合軍は、最後の戦いの準備を完璧に整えた。

「死ぬ時も、一緒だ！」

「平和　そして誰もいなくなる？」

「溶岩　五月晴れを隠す」

「錦符　死の宣告は錦のように儂く」

「温暖　刹那の灼熱」

「燈咲　禁断の果实という憐み」

「錦目　目を抉る錦の美しさ」

六人の戦士の弾幕が、6つの戦艦を襲った。

「こちらも総攻撃だ。かかれ！」

「はっ！」

植物達の戦争がヒートアップしていった。

次回に続く

第二十八話 絶望を超えて（後書き）

次回は、ナチス科大分解。お楽しみに

第二十九話 ナチス科大分解（前書き）

いよいよ、最終決戦始動。

第二十九話 ナチス科大分解

ナチス科は、植物平和連合軍を全員殺そうと考えていたが、肝心の殺戮音波が故障していた。

「くそ、お前ら一刻も早く修理しろ！」

ナチスの部下達は、混乱をしまくっていた。

スベリヒユ科とワサビノキ科は、ナチス科を追い込める感じになっていた。

「ナチス將軍、撤退したらよろしいかと・・・」

ナチス科の一人、ジツニユトは、射殺された。

これがナチス科の属がバラバラになってしまうことになるとは、まだ知る由もない。

トウダイグサ・スカーレット大佐とナツトウダイ・スカーレット軍曹は、この戦いに秘密兵器を利用しようと考えて、急ピッチで作っていた。

「これを使えば、ナチスの奴等は、ひとたまりもないな。」

「そうですね、決死の作戦実行ですよそろそろ。」

「そうだな！」

決死の作戦の正体がついに明かされる。

次回、最終回まであと一回、三十話だけ一太郎で書きます。3ペー
ジ半という大スペシャルに期待しましょう。

第二十九話 ナチス科大分解（後書き）

次回は、終結に近づいて。お楽しみに

第三十話 終結近づいて（前書き）

最終回前の物語です。

第三十話 終結近づいて

ナチス科は、次第に焦り始めていた。

トウダイグサ・スカーレット大佐は、タカトウダイ中佐に教えた。

「本気ですか？ナチス科の本基地に突っ込むなんて。」

「正気だ。赤夜ナチスを殺すためにも。平和の紅い悪魔が邪悪な悪魔を野放しにするわけがない！」

トウダイグサ・スカーレット大佐は、魔剣クラウ・ソラスのEXバリエーションに変形させた。

正義の炎を纏っている姿は、魔剣の数倍の威力を持っている。

「では、行くぜ。」

トウダイグサ・スカーレット大佐は、ナチス科の基地に見事に侵入した。

トウダイグサ科達は、500アクセス到達したことを知り、パワーアップした殲滅符を利用した。

「俺達は、平和を愛して守らなければならない。そんな平和を壊すナチス科は許さないのが植物たちのモットーだ！」

コニシキソウ三等兵は、殲滅符からビームを撃った。

ナチス科の一人が、首だけになった。

トウダイグサ・スカーレット大佐は、ナチス科の一人と対決していた。

「貴様、殺してやる。」

「その狂気、そっくりそのままおまえに返してやる！」

「なにっ？」

「和平 炎の平和調印」

トウダイグサ・スカーレット大佐は、弾幕でナチス科の一人を倒した。

植物平和連合軍は、戦艦で攻めまくった。

「あと少しでナチス科大量絶滅ジャー！」

バラ大将が言った。

「思い切り、はしゃぐぜ！」

ハツキソウとニシキソウは、ナチス科の首をそぎ落として胸を抉った。

トウダイグサ・スカーレット大佐は、魔剣クラウ・ソラスをナチス本人のいる部屋のドアを切り裂いた。

「トウダイグサ・スカーレット大佐、待ちくたびれたぜ！」

ナチスは、とてもでかい鉈を持っていた。

トウダイグサ・スカーレット大佐は、平和の力を魔剣クラウ・ソラスに注いだ。

「これが、平和の力だ。魔剣クリムゾンピースセイバー！」

クリムゾンピースセイバーとは、クラウ・ソラスに平和の力を注ぎに注ぎまくると変化した姿。大陸一つ消すことができる破壊力と其の力で平和を創ることができる。

トウダイグサ・スカーレット大佐とナチスは、剣と鉈をぶつけた。

その衝撃波で壁や床などが壊れた。

一方、外ではナチス科の赤黒い死体がたくさんあった。

ポインセチアは、右腹を痛めていた。

「あとは、大佐殿頼むぞ。」

ナチスは、鉈を振り回すだけだが、トウダイグサ・スカーレット大佐は、軽々と避けている。

「舐めやがってー！」

「お前の攻撃には、無駄が多いようだな。」

「俺に無駄はない！死ぬトウダイグサー！」

「ふんっ！クリムゾンピースセイバーよ。暴風を起こして相手を吹き飛ばせ。」

トウダイグサ・スカーレット大佐は、クリムゾンピースセイバーを横に振りかぶった途端、突風が発生してナチスを吹き飛ばした。

「くそ、トウダイグサめ、貴様を殺す気になってきたぜ。」

トウダイグサ・スカーレット大佐は、クリムゾンピースセイバーを持って、ナチスは巨大な鉈を持って相殺しようとした。

はたして結果はどうなったのか？

ナチスの鉈が折れて、左肩から血が飛び出していた。

トウダイグサ・スカーレット大佐は、左頬から血を流していた。

「これが無駄な動きと無駄ではない動きの差です。」

「くそっ。」

トウダイグサ・スカーレット大佐は、平和を創ると同時に邪魔ものを排除することにした。

「平和創りの生贄」

鋭い風圧が、ナチスの胸と首と額を貫いた。

ナチスは、どさつと倒れて闇に堕ちて行った。

トウダイグサ・スカーレット大佐は、力を使い果たして倒れてしまった。

第三十話 終結近づいて（後書き）

次回、最終回 平和になった植物界と二人の吸血鬼の正体。お楽しみに

最終回 平和になった植物界と二人の吸血鬼の正体（前書き）

戦いが終結した。そして、遂にトウダイグサ・スカーレット大佐と
ナットウダイ・スカーレット軍曹とある人物の関係が遂に明らかに
！

最終回 平和になった植物界と二人の吸血鬼の正体

トウダイグサ・スカーレット大佐は、目覚めると其処は植物平和連合軍の医務室だった。

「大佐殿、戦いに疲れて倒れているですよ。」

ナツトウダイ・スカーレット軍曹が言った。

トウダイグサ・スカーレット大佐は、納得した。

植物戦争に巻き込まれそうになった人間の解放は、きちんとした。

タカトウダイ中佐は、ナチス科の死体を視て、こう言った。

「これだけの死体の数どうします？大佐殿。」

「俺にいい考えがある。」

トウダイグサ・スカーレット大佐とナツトウダイ・スカーレット軍曹は、紅魔館に行った。

実は、信じられない真実がある。

トウダイグサ・スカーレット大佐とナットウダイ・スカーレット軍曹は、レミア・スカーレットとフランドール・スカーレットとは、従兄妹関係である。

トウダイグサ・スカーレット大佐は「とはいえ複雑なんだ。従兄妹とはいえるものの遠い感じの従兄妹なんだ。」

「誰に向かっていらっしゃるんですか？ 兄さん。」

ナットウダイ・スカーレット軍曹はそう言った。

トウダイグサ・スカーレット大佐は、慌てて振り向いた。

十六夜昨夜も無事に紅魔館に戻れた。そのお礼をしにレミアが、トウダイグサ・スカーレット大佐達の前に来た。

「どうもありがとう、お兄様とナットウダイ。お礼だけどなかなか見つからなかった。」

「いいよ。それより、紅魔館の食糧が尽きかかっているって聞いて

こんなにたくさん持ってきたぜ。」

こうして、全ての争いは取り除かれて、ナチス科の残党も降伏して東方植物戦争記は、終結をすることとなった。

東方植物戦争記 \ legend of plant wars \
終演。

最終回 平和になった植物界と二人の吸血鬼の正体（後書き）

東方植物戦争記完結万歳。皆さんは、東方植物戦争記をどう思いましたか？此処までたどり着いて良かったと思います。自分は。

7月1日に東方暗想天（formation cross power）が始まります。

東方暗想天それは、東方、台風X号の東方のキャラクターの奇妙な物語である。

名前が、緋想天のパロディだと思った人は、正解です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5686i/>

東方植物戦争記 ~ legend of Plant wars

2010年10月11日15時45分発行